東北英文学会（日本英文学会東北支部）
第 64 回大会プログラム

共催：秋田英語英文学会
日本アメリカ文学会東北支部

第 1 日　　12 月 5 日（土）

評議員会【12:30】（小会議室 2）

開会式【14:00】（講堂）

○開会の言葉　　東北英文学会会長　　遠藤　健一

研究発表　【14:30~17:40】

第一室(講堂)

司会　秋田大学教授　　佐々木　和貴

【14:30~15:00】
『パリの虐殺』における新たな歴史編纂の可能性
岩手県立大学教授　　石橋敬太郎

【15:10~15:40】
『ハムレット』の英雄像と ars moriendi の刷新
仙台白百合女子大学教授　　横尾　元意

司会　東北学院大学准教授　　横内　一雄

【15:50~16:20】
同情を欠いた空間
―『一握の塵』(*A Handful of Dust*)におけるコミュニケーションの在り方と情感―
東北大学助手　　三枝　和彦

【16:30~17:00】
『蝿の王』におけるアイロニー―語りとアレゴリーの時間性―
東北学院大学大学院　　小林　亜希

第二室(大講義室)

司会　福島大学教授　　後藤　史子

【14:30~15:00】
Sister Carrie の視線の問題
東北学院大学大学院　　宮澤　文雄

【15:10~15:40】
Dreiser が見出した Light とは何か
東洋大学非常勤講師　　渡邊　真由美

司会　福島大学准教授　　川田　潤

【15:50~16:20】
オキシモロン的ジャンルとしての SF の輪郭について
八戸工業大学准教授　　高橋　史朗

第三室(小講義室 2)

司会　東北薬科大学講師　　高橋　美佳

【14:30~15:00】
The Raising Analysis and *That*-relatives
東北大学大学院　　千坂　裕美

【15:10~15:40】
Head-Movement, EPP-Satisfaction and Empty Pronouns
東北学院大学大学院　　後藤　亘

司会　東北学院大学准教授　　岸　浩介

【15:50~16:20】
移動と削除の相互作用―Fragments 構文の観点から―
東北大学大学院　　木村　博子

【16:30~17:00】
言語とシンパシー
東北大学大学院　　庄子　渚

懇親会【18:00~】
会場：秋田キャッスルホテル

〒010-0001　秋田市中通 1-3-5
TEL　018-834-1141　URL　http://www.castle-hotel.co.jp/
会費　　7,000 円

第２日　　12 月 6 日（日）

SYMPOSIA【10:00~13:00】

イギリス文学部門
（講堂）
英文学におけるジェンダー／ジャンル

司会
小樽商科大学教授　　吉田　直希
講師
筑波大学准教授　　吉原ゆかり
関東学院大学教授　　仙葉　　豊
東京学芸大学教授　　大田　信良

アメリカ文学部門
（大講義室）
「シグニファイン（グ）・モンキー」―その理論と可能性

司会・講師
宮城学院女子大学非常勤講師　清水菜穂
講師
国士舘大学准教授　　馬場聡
仙台高専名取教授　　飯田清志
仙台白百合女子大学講師　　山田恵

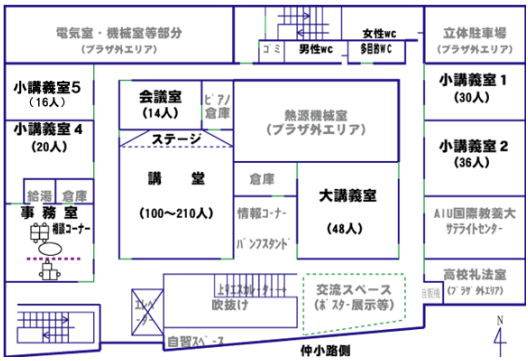
英語学・英語教育部門
（小講義室 2）
Tasks' Potentials for Reconstructing English Teaching in Japan

司会・講師
秋田大学　　SASAKI Masako

講師
秋田大学　　WAKAARI Yasuhiko
秋田大学大学院　　TORII Mizuho
秋田大学大学院　　SATO Chihiro

会　場　案　内

1）大会会場：秋田カレッジプラザ



＊会場の駐車スペースは 40 台となっております。お車でお越しになる際には、会場の駐車場が満車になった場合、近くの有料駐車場をお探しいただくことになるかもしれませんので、その点ご了承ください。

2）懇親会場：秋田キャッスルホテル

12 月 5 日（土）14:30~

研究発表

第一室

『パリの虐殺』における新たな歴史編纂の可能性

石橋　敬太郎
（岩手県立大学教授）

『パリの虐殺』において、マーロウが 1572 年の聖バルテルミ大虐殺に端を発するフランス史を再現する際に、資料と考えられているフランソワ・オットマンやシモン・グラールの歴史書の説明を離れて、王位を狙うギーズの野心を強調し、徹底的にマキャヴェルリ的な悪党として描いたのはなぜなのであろうか。他方、劇作家はナヴァールを摂理に従う国王としている。この問題を考えるにあたり、16 世紀末に摂理や運命を基盤とする歴史編纂に対して、マキャヴェルリやタキトゥスに歴史観を仰ぎ、人間の本質や行動から歴史の因果関係を探るものが現出しつつあったことに着目したい。すなわち、マーロウがギーズをマキャヴェルリ的な悪党とし、ナヴァールを摂理に従う国王として、両者が織りなすフランス史を再現したのは、摂理主義的な歴史と世俗的なものとの歴史編纂の拮抗を強く意識し、新しい歴史編纂の可能性を追求したためであったと考えられるのである。

『ハムレット』の英雄像と ars moriendi の刷新

横尾　元意
(仙台白百合女子大学教授)

シェイクスピアは『ハムレット』を創作するにあたって、12 世紀のアムレス伝説を主たる材源とし、1520 年代に場面設定して、1600 年頃完成させた。この時期はイギリス宗教改革時代に重なり、この作品の中には多くの宗教上の言及がある。特に、葬送儀礼に関するものが目立つ。さて、中世後期にはペストが流行し、死に逝く人を取り扱うマニュアルが書かれる。これが ars moriendi である。煉獄で苦しむ先王ハムレットの亡霊の告白はこれに合致している。Claudius の祈りの言葉や Laertes の行為にも関連が見られる。これらのカトリックの伝統に生きる人達のなかで、Hamlet はウィテンベルグの学生として、ルター派の考え方をしている。特に、帰国後 Hamlet は予定論的死生観を示す言評が多くな

る。というのも、宗教改革時代に入り、ルター派の ars moriendi が書かれるようになった。その最初のものがルターの *A Sermon on Preparing to Die* (1519)である。この ars moriendi の刷新を手掛かりに、アングリカンの英雄像を垣間見ようと思っている。

同情を欠いた空間
—『一握の塵』(*A Handful of Dust*) における
コミュニケーションの在り方と情感—

三枝　和彦
(東北大学助手)

伝統的な文化を愛好する保守的な作家と目されるイヴリン・ウォー（Evelyn Waugh, 1903-66）は、新しい文化や通信メディアにも強い関心を持っており、それらの登場が人間内面に看過できない重大な影響を及ぼしていることを、その作品に描き出している。本発表では、ウォーの最高傑作と評価される『一握の塵』(*A Handful of Dust*, 1934）における電話とフラットの表象に注目して作品を読み解くことで、通信技術の進歩と住空間の細分化が変容させたコミュニケーションの在り方が、他人の痛みに対する理解と配慮の欠如という人々の情感と密接な関連があることを検証する。その分析を、作品の批評史の主流である、ヴィクトリア朝風文化に対する風刺や野蛮と文明の対立という解釈に連結させる。そのようにして、この小説が、ウォー流のブラックユーモアを交えながら、技術的進歩と空間的変容が人間の情感に与える影響という、現代社会でより重要性をもつ問題を扱っていることを論じていく。

『蠅の王』におけるアイロニー
—語りとアレゴリーの時間性—

小林　亜希
(東北学院大学大学院)

ウィリアム・ゴールディング（William Golding, 1911-1993）の『蠅の王』(*Lord of the Flies*, 1954）は、寓話（fable）というジャンルの特性上、テクスト内部の意味作用の多くはアレゴリーに依存しているように思われる。ところが、アレゴリーによって喚起されるイメージと記号の間には常に隔たりが存在するにもかかわらず、記号と起源をあたかも同一のものとして表象しようとする作中人物たちの錯誤が執拗に反復されている。少年達の蛮行によってのみならず、記号と起源の隔たりが、作中人物たちには理解されぬままに、劇的アイロニーとして私たち読者の前に立ち現れることによって、ユートピアであったはずの熱帯の孤島は、ディストピアへと変貌を遂げるのである。本発表では、これまで素朴に読まれてきたアレゴリーの意味作用を、7～9 章を中心に読み直し、語り手によるアレゴリカルな言語の意識的な使用を分析することで、ゴールディングが拘った「悪」の主題に肉迫したいと考えている。

第二室

Sister Carrie の視線の問題

宮澤　文雄
（東北学院大学大学院）

本発表では、セオドア・ドライサーの『シスター・キャリー』（1900）における視線の問題を扱う。キャリーやハーストウッドに代表されるように魅惑も破壊も内部に抱えている都市を問題に扱うとき、この小説のなかで描かれる鉄道やデパートメント-ストア、劇場、群集といった都市の背景を無視することはできない。この物理的な存在は、登場人物になんらかの影響を絶えず与えているからである。物語の冒頭のドルーエの言葉に表れているように、キャリーをはじめとする登場人物は、「見ること／見られること」を意識しており、視線の交換ないし一方的に眼差す行為が繰り返しおこなわれる。また、商品との関わりが切り離せない消費社会にあって、物質の所有がマテリアルな自我を所有することであり、理想化されたセルフ-イメージが常に他者の模倣を通して生産されることを確認しながら、他者や商品との関係から生ずる欲望の視線を分析していきたい。

Dreiser が見出した Light とは何か

渡邊　真由美
（東洋大学非常勤講師）

The Bulwark(1946)は、Theodore Dreiser(1871-1945)の死後、*An American Tragedy*(1925)以来、長編小説としては 20 年ぶりに発表された作品である。クェーカー教徒の一代記である本作品は、20 年代までに発表された一連の作品とはテーマ的に大きな相違点――クェーカー教に対する Dreiser の傾倒など――があって、読まれることが少ない。*Bulwark* の Etta は、Carrie のような社会的に反感を買うような行動にでても、結末において、人生の意味を自ら見出し、Carrie をはじめとする初期の作品の登場人物によってなされた自らの存在や行動の意味を求めて煩悶する姿はない。しかし、本発表では、*The Bulwark* と初期の作品との連続性を指摘しつつ、Dreiser が関わった社会活動も視野に入れながら Dreiser が見出した答えとはどのようなものであったのかを考えていきたい。

オキシモロン的ジャンルとしての SF の輪郭について

高橋　史朗
（八戸工業大学准教授）

ダルコ・スーヴィン（Darko Suvin）の SF の定義は、これまで様々な批判の対象とな

ってきた。本発表では、第一に、認識と異化に関わる定義自体の曖昧性に関する批判について検証し、これらの代表的批判がスーヴィンの理論を超克できていないことを論じる。なお、同時に SF 的要素が他のジャンル―とりわけ自然主義文学―の中で果たす作用についても言及したい。第二に、ノーヴム（新事象）を前提とすることによって生じる、SF は進歩や資本主義といったモダニティを無批判に受容するという観点からの批判を検証し、SF が提示する世界は論理的思考の帰結ではなく、むしろモダニティを対象化する契機となることを示す。最後に、これらの議論を踏まえ、多彩なオキシモロンが表象するジャンルとしての SF の輪郭を提示する。合わせて、弁証法的な形式主義的ジャンル論の可能性と優れた SF 作品に内包されるべきラディカリティに関して述べることになる。

第三室

The Raising Analysis and *That*-relatives

千坂　裕美
（東北大学大学院）

英語の関係詞節では，これまで主に Raising 分析と Matching 分析の二つがなされてきた．Raising 分析とは，主要部を関係詞節内部の位置に生成し，そこから直接に先行詞の位置に移動する分析である．一方 Matching 分析とは，主要部を先行詞の位置に生成しておき，CP 内で先行詞と同じ意味内容を持った名詞句が移動する．移動後に，その名詞句を wh 句などに変える分析である．

本発表では，まず Raising 分析の代表的な提案である Kayne(1994)の分析の問題点を指摘する．そして，Raising 分析・Matching 分析と that/φ関係詞・wh 関係詞の分布との相関関係を明白にし，Raising 分析を受ける関係詞節では wh 関係詞は生起できず，wh 関係詞が生起する関係詞節では常に Matching 分析による派生が行われているということを主張し，事実そうであることを示す．さらに，このような一般化が得られる Raising 分析の構造を提案したい．

Feature Inheritance, Probe-Goal and N ull Arguments

後藤　亘
（東北学院大学大学院）

本発表では，Chomsky (2008)の素性継承メカニズムに基づく Probe-Goal システムに対して「削除素性（Delete-feature）」なる新たな素性をフェーズ主要部（C）に仮定し，その結果，どのような帰結が得られるのかを考察する．まず，経験的帰結として，英語やイタリア語，ドイツ語等で観察される空代名詞の異なった分布に対して統一的な説明が可能となるということを示す．具体的には，英語やイタリア語等の non-V2 言語では，C から T への素性継承の結果，T の Agree 素性を介してある代名詞の削除が決定されると分析する．こ

れに対して，ドイツ語等の V2 言語では，C か w)□・・囮ぢへの素性継承は行われず，直接，C の Edge 素性を介してその可能性が決定されると分析する．このような分析の理論的帰結として，従来，イタリア語等の空主語言語において想定されてきた発音されない代名詞（pro）の不必要性が導かれる．

移動と削除の相互作用
－Fragments 構文の観点から－

木村　博子
（東北大学大学院）

本発表では、削除構文における残余句は通常の移動操作の適用を免れる場合があるとする van Craenenbroeck and den Dikken (2006)分析に対する新たな証拠を、様々な種類の省略構文から提示する。また本分析では、省略構文における残余句の移動の有無は Agbayani (2006)の移動理論で提案された PF 隣接条件をもとに決定づけられるべきである論じる。PF 隣接条件に基づき残余句の移動の有無を決定する本分析では、Short Answer で観察される格の交替現象や Sluicing 文と VP-ellipsis 文の対比を自然なものとして捉えることが出来る。さらに通言語的には、Malagacy において、通常は移動操作の適用を受けない要素が Short Answer における残余句になるという事実も捉えられると論じる。また、本分析が妥当である限りにおいて、本分析で扱う省略現象の特性は Agbayani(2006)の移動理論を支持する証拠となる。

言語とシンパシー

庄子　渚
（東北大学大学院）

あるコミュニティ構成員の間には特徴的な言葉遣いがなされている。本発表では、そのコミュニティあるいは構成員へ「シンパシー（共感）をもってコミュニケートしようとする」言葉の特徴を分析し、「近づこう」とする姿勢が言葉遣いとどう関わるかを、「外からのメッセージ」という視点で、それぞれのメディア（ライトノベル・ブログ・雑誌）が「外部者とてあるコミュニティにどんな風にシンパシーを伝えようとしているか」を検証した。その結果、書き手側は、働きかける対象であるコミュニティで使用される言葉遣いを想定し、それを用いて好まれる内容で文章を綴ることが分かった。発表に於いては、それぞれのメディア毎の特徴を詳しく観察する。

12月6日（日）10:00~

SYMPOSIA

〔イギリス文学部門〕

英文学におけるジェンダー／ジャンル

司会　小樽商科大学教授　　吉田　直希
講師　筑波大学准教授　　吉原ゆかり
　　関東学院大学教授　　仙葉　豊
　　東京学芸大学教授　　大田　信良

司会　小樽商科大学教授　　吉田　直希

本シンポジウムでは、近代的主体の誕生を「英文学」というジャンルの歴史と重ね合わせて検討する。その際、近代以前の伝統的な知においては顕在化していなかった様々な差異が、17 世紀以降、ジェンダーを軸に明示的に表象されていく過程を辿ってみる。まず、宮廷から国家が切り離され、政治から経済が分離し、さらに経済的言説と文学的言説が差別化され、ドメスティックな領域から新たな女性が析出されていく近代を「英文学」誕生の視点から再構成していく。もちろん、近代的主体はこの新たなジャンルとともに 17、18 世紀に完成するものではない。そこで次に、歴史の連続と断絶の関係性を踏まえ、19 世紀以降のジャンルの細分化と主体の変容を概観する。そして最後に、経済・文化がグローバル化する今日、「英文学」研究に求められる意義は何なのかを検討し、議論を深めていきたい。

好事家(virtuoso) たちの身体

筑波大学准教授　　吉原ゆかり

珍奇と脅威・驚異を愛好してやまない 17 世紀～18 世紀の好事家(virtuoso)たちは、自身が奇天烈珍獣だ。Jonson, *Epicoene*、Shadwell, *Virtuoso* 、Centlivre, *The Basset Table*、Pope, Gay and Arbuthnot, *Three Hours after Marriage* など、好事家たちを嘲笑する作品をひとつのジャンルと見て、そこで curiosity に憑かれた男女たちの（性的）身体が、どのように表象されているのかを考察する。男性 virtuoso たちは男性性を失った存在であり、女性 virtuoso たちは、男性の curiosity を刺激する客体であるべきでありながら、自身が

curiosity を持つ知の主体となろうとする。Virtuoso は、男女の境界線を危機に陥れる存在――ときとして、生物的身体としての区別すら曖昧にしてしまう存在――場合によっては「種」の境界線すらも瓦解させてしまうかもしれない存在として、恐怖ゆえの嘲笑にさらされる。Virtuoso たちに向けられた嘲笑を解剖することで、異文化との出会いを含めた知の領域の拡大や、階級制度、ジェンダー関係、身体理解にまつわる、時代の欲望と不安を読み解く。

ホガースとメアリー・トフト事件について

関東学院大学教授　　仙葉　豊

1726 年秋、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』が刊行された直後に、サリー州の片田舎の住人であった、無学文盲の女メアリー・トフトは、17 匹の兎を産んだという異様な事件の主人公になって、一躍当時の時の人となる。もちろんこの事件はすぐに詐欺的な作り話であったことがあばかれることになるのだが、それにしても、何らかの外界からの影響を胎児に受けて、妊娠時の女性がモンスターを産むという考えが、当時も医学的な真実の言説としてまだ根強く残っており、医者たちのなかには、この真実性を信じるものがいたからこそ、このような詐欺的な行為が、国王付きの医者や産科医によってさえも、一時的にせよ信じられたのだった。ここには単なるゴシップ以上の意味があるように思われる。この事件をきっかけとして生まれたさまざまな風刺詩、医学的なパンフレットなどにまじってだされた、ホガースの *Cunicurarii, or The Wise Men of Godliman in Consultation* (1726)を中心にこのケースを考えてみたい。またこの事件は、半世紀ほどあとにだされる、スターンの『トリストラム・シャンディ』の有名な誕生シーンとも関連づけられるように思える。医学的なディスコースと銅版画さらに文学作品との交錯した領域を横断してみたい。

マネーへの思索＝投機(speculation)とサッチャリズム以降の帝国 ――ジャンルはほんとに解体したのか？

東京学芸大学教授　　大田　信良

本発表は、「英文学」というジャンルの「誕生」ではなく、むしろその「死」の歴史的過程を、サッチャリズム以降の文学およびそれ以外のジャンルにおいて生産された女性性のさまざまな表象・フィギュレーションと関連付けながら、検討する。

具体的には、Martin Amis の *Money: A Suicide Note* (1985)に提示された英国小説と米国ハリウッド映画の対比、男女の不倫と男性間の詐欺といった主題を、ほかのさまざまなサブテクストやジャンルとあわせてマッピングし解釈したい。そして、英国の旧帝国主義から帝国アメリカへの「移行」の問題とも関連付けたい。近代国民国家とジャンルとしての「英文学」は、ほんとに、解体したのか？鉄の女サッチャーの登場により断行されたとされる「構造改革」、すなわち、グローバリゼーション、国家の積極的介入による福祉社会から民営化、制御不能なまでに増大し流通し続けるマネー・金融資本の speculation 、等々により、国民文学としての英国小説はどのよう文化・経済のグローバル化に対応しながら

サヴァイヴァルしようとしてきているのか考えたい。そもそも「英文学」というもの自体が、20 世紀のある時期、帝国アメリカとの関係性によって創造され生産されたジャンルあるいは制度だったのではないだろうか？

〔アメリカ文学部門〕

「シグニファイン（グ）・モンキー」―その理論と可能性

司会・講師　宮城学院女子大学非常勤講師　清水　菜穂
講師　国士舘大学准教授　馬場　聡
仙台高専名取教授　飯田　清志
仙台白百合女子大学講師　山田　恵

「シグニファイン（グ）・モンキー」とは何か
―黒人文学における反復と改変の修辞的戦略―

宮城学院女子大学非常勤講師　清水 菜穂

黒人文学研究の第一人者 Henry Louis Gates Jr.の *The Signifying Monkey: A Theory of African-American Literary Criticism* (1988)によって文学研究・文学批評に導入された「シグニファイン（グ）」は、文学ばかりか音楽など他の分野においても広く言及されている画期的な理論である。本シンポジウムでは、ある意味で難解かつ論争を呼んだこの理論についての理解を深めると同時に、その批評理論としての可能性を検証することを目的とする。

「シグニファイン（グ）」とは、黒人文化において伝統的に継承されてきたヴァナキュラーな言語形態に特徴的な、自由で様々な言葉遊びであり、既存の標準英語の意味を転覆させる修辞的戦略である。ゲイツは、「二重の声」や「間テクスト性」といった西洋文学の伝統と考えられてきたものが、アフリカを起源とする文化のなかでも独自なものとして発展し、継承されてきたと主張する。

シンポジウムの皮切りとしてまずここでは、ゲイツによる「シグニファイン（グ）」の起源を確認し、その後、反復と改変を特徴とする「シグニファイン（グ）」の理論的枠組みの概要を、いくつかのキーワードおよびゲイツの著書の中で紹介されている「シグニファイン（グ）」の例とともに解説する。

シグニファイン（グ）理論の応用とその批判的解釈

国士舘大学准教授　馬場 聡

The Signifying Monkey は出版されて既に 20 年が経過したが、現在でもなお最も有効な黒人文学批評理論のバイブルとして常に参照されている。本発表では、本書第二部“Reading the Tradition”におけるシグニファイン(グ)理論の文学テクストへの応用例を概説し、「スピーカリー・テキスト」、「トーキング・ブック」に代表されるようなゲイツの概念について検討する。さらに、映画、音楽、演劇等の文学テクスト以外への応用例についても紹介したい。

ゲイツのシグニファイン(グ)理論は当初より注目を集め、多くの研究者によって援用されてきたが、決して無批判に受容されてきたわけではない。たとえば、D.G. Myers は、ゲイツが「黒人」、あるいは、「黒人性」というものを本質化してしまっていることに警鐘をならす。シグニファイン(グ)理論に対する批判のいくつかを検証した上で、この理論の可能性と限界について論じたい。

シグニファイン(グ)理論の黒人音楽解釈への応用

仙台高専名取教授　飯田 清志

シグニファイン(グ)の理論は文学批評のみならず、他の黒人文化の批評にも応用できる。たとえば、音楽(特にジャズ)においては、ある著名曲のさまざまな音楽スタイルにおける演奏を比べることで、先行するテクストの繰り返しと多様な改変のあり様が確認できる。

今回、改変のプロセスを見て行くのは、ニュー・オリンズの伝統曲 "When the Saints Go Marching In" で、古典ジャズ、ゴスペル、リズム&ブルース、アヴァンギャルド・ジャズ等における表現のかたちを紹介する。特に、Albert Ayler による改変 "Truth Is Marching In"は、原型を突き崩しながら、そのコアの部分を明らかにする芸術的かつ建設的なシグニファイン(グ)の実例として重要である。

さらに、黒人音楽には、ポジティヴな改変の他にも，皮肉やあざけりという攻撃的な改変もある。このタイプの事例を紹介し、シグニファイン(グ)のレトリックとしての広がりを指摘する。

Charles Johnson による奴隷体験記の現代的改変

仙台白百合女子大学講師　山田 恵

The Signifying Monkey においては、奴隷体験記がさまざまな改変を経てきたことが紹介されているが、本発表では、現代黒人作家による改変の実例として、Charles Johnson のテクストをとりあげる。

ゲイツは前掲書において Mikhail Bakhtin の主張を引き合いに出し、「特に多民族社会にあっては、大衆は自由に恣意的な代用を利用し、意図的な行為のなかでシニフィエを置き換えることによってシニフィアンを分裂させることを力強く主張するものだ」(50-51)と主張している。つまり、黒人性のテクストはさまざまな民族のシニフィエを置き換えながら未来に向けて無限に広がり続けるということを示唆しているのである。

本発表では、このようなゲイツの主張を裏付ける例としてジョンソンの *Oxherding Tale*(1982)に着目する。具体的には、ジョンソンが、この作品で奴隷体験記の形式を用いながらも、さまざまな民族のテクストを下敷きにしながら改変を試みていることを明らかにしてみたい。

〔英語学・英語教育部門〕

Tasks' Potentials for Reconstructing English Teaching in Japan

司会・講師　秋田大学　SASAKI Masako
講師　秋田大学　WAKAARI Yasuhiko
秋田大学大学院　TORII Mizuho
秋田大学大学院　SATO Chihiro

Tasks' Potentials for Reconstructing English Language Teaching in Japan

Would you like to teach/learn English *for* communication or *as* communication? Your answer to this question may reveal your perspective on how to teach/learn English. The difference between *for* and *as* implies more than it looks.

This symposium is intended to share this English language teaching/learning issue with you and offer an opportunity to shed light on "tasks" and the relevant second language acquisition (SLA) theories and terms and classroom SLA teaching/learning.

Identifying some problems with task-based language teaching in the Japanese English language teaching context, four presenters make suggestions to direct teaching English in Japan into a more communicative one. First, Wakaari Yasuhiko discusses the issues in and possibility of adopting task-based language teaching in English classrooms in Japan. Next, Sato Chihiro reports on the influence of task input and conditions as a stage of a task design with an example of a jigsaw task. Then, as a suggestion of methodology, Torii Mizuho presents a procedure to implement a task, focusing on negotiation of meaning, communication strategies, and strategic competence. Lastly, Masako Sasaki examines learners' written reflections on their language performance in language-use task and their perspective on language learning as a cognitive aspect of task-based language learning.

Tasks seem potential in classroom language teaching/learning, but the potentials have been neither sufficiently proved nor widely recognized yet. Not only further research but also continued discussion, including this symposium, is necessary.

Issues in and possibility of adopting task-based language teaching in English classrooms in Japan

WAKAARI Yasuhiko (Akita University)

More than twenty years have passed since Task-based language teaching (TBLT) was proposed as a teaching approach at the time in which meaning was considered to have primary importance in communication and therefore teaching approaches had to take this into account. However, it does not seem that the approach has been adopted in English classrooms in Japan, as Tsuchii (1995) and Izumi (2007) state. This is mainly because the circumstances which English language teaching

(ELT) in Japan faces do not allow teachers to adopt it in their classrooms, because passing entrance examinations has been the most important goal for not only students but also for their parents, teachers, and schools, and the activities which do not directly serve this purpose have been considered to have secondary importance. In addition to this, there have been problems such as the large class size, the lack of class hours necessary for acquiring communication skills, and the heavy workload of teachers, and so on. These problems have made it difficult for teachers to implement this revolutionary approach.

In this symposium I will discuss some of the issues in adopting TBLT in ELT in Japan, focusing on the issue of textbooks authorized by the Ministry of Education, Culture, Science, Sports and Technology, since textbooks tend to function as a syllabus for teaching in the Japanese context. By showing examples of task-based lessons, I will also explore how tasks can be implemented in Japanese classes.

The effects of jigsaw task input types on the output and interaction for second language acquisition

SATO Chihiro (Graduate Course of Akita University)

This study aims to analyse the effects of different input types on the output and interaction among language learners during a jigsaw task. The task is designed to encourage every learner's output in the target language (TL) so that the learners can interact in TL. Comparing the interactions between groups with different types of input, the present research will suggest relevant task conditions and types of input for language acquisition.

Twenty-three first-grade university students were divided into 6 groups and involved in a jigsaw task including two group activities: (1) to complete the order of a four-frame cartoon and (2) to get the punch line to the story. All the groups were given the same cartoon and required to follow the same task process, but each group was given one of the following three types of input: (1) pictures only (Jigsaw I), (2) English descriptions only (Jigsaw II), and (3) a combination of the Jigsaw I pictures and the Jigsaw II English descriptions (Jigsaw III).

It was found out that Jigsaw I learners had the most frequent opportunities to notice their lack of lexical knowledge; Jigsaw II learners frequently requested the repetition of group member's reading of the English descriptions; and Jigsaw III learners wrote their answer to the punch line question logically by using conjunctions. These features and other findings will be more discussed in relation to the three input types.

Debate as a Task: From Perspectives of Negotiation of Meaning, Communication Strategies, and Strategic Competence

TORII Mizuho (Graduate Course of Akita University)

The purpose of this study is to examine the effects of debate as a task on learners' second language acquisition (SLA). This study suggests debate as a task which provides learners with opportunities to negotiate meaning. In the debate task, the learners are expected to exchange opinions through negotiation of meaning to well understand the other side's ideas. According to the Interaction Hypothesis, negotiation of meaning fosters learners' SLA. Therefore, it is possible that debate which includes many chances of negotiation of meaning could be a task which promotes learners' SLA.

Negotiation of meaning happens when interlocutors attempt to share each other's ideas in the

process of resolving communication breakdowns. Learners try to negotiate meaning by using communication strategies (CS). Ellis (2003) mentions that CS may assist language acquisition because they help to keep conversation going and secure learners more input which is necessary for SLA. A competence which relates to the use of CS is strategic competence. According to Bachman (1996), this competence controls a process that provides a cognitive management function in language use.

Based on the author's hypothesis that debate promotes SLA, this study will analyze interaction among learners by focusing on the relationship among negotiation of meaning, CS and strategic competence. Furthermore, this study will suggest a teaching process employing pre-task and teacher's intervention which would enhance the merit that debate has in English class.

Empirical learning of second language acquisition for teacher development: What will task-based language learning suggest to prospective teachers of English?

SASAKI Masako (Akita University)

Knowledge of second language acquisition is essential in teacher education at university for prospective teachers of English and also lifelong teacher development after their graduation from university. The knowledge, however, should not remain only in the realm of theory but should be empirically learned in some language-use context so that the prospective teachers can experientially understand what second language acquisition is like and make use of the knowledge-based experience in their future English language teaching.

The purpose of this presentation is to examine how they reflect on their own learning in a task-based language learning course that the author designed with Community Involvement Learning as a methodological principle. The participants in this research were 14 Akita University students who took the author's course, "Applied Linguistics I," in the first semester this 2009 academic year. This presentation will discuss the possibility of the influence of task-based language learning on prospective teachers' cognition of language learning and teaching as a cognitive aspect of task-based language learning.

大会準備委員

開催校委員	大西洋一	村上　東
イギリス文学　部門	大西洋一	霜鳥慶邦
アメリカ文学　部門	大野朝子	山田　恵
英語学・英語教育部門	岸　浩介	高橋美佳